

てごの会

Vol.1



「てご」とは山口県の方言で、「手伝う」という意味です。



右から菅原浩志監督、一原英樹会長、作間清子プロデューサー



1/18の記者会見には報道関係者が多数来られました。

「てごの会」の「てご」とは山口県の方言で、「手伝う。」ということの意味します。
このたび周南市鹿野地区において「てごの会」が設立されました。

周南市のふるさと大志であり、市のPR映画も手掛けられている菅原浩志映画監督が鹿野地区を舞台とする新作映画の準備を進められています。この新作映画の製作を応援しよう、そしてこの取組みを鹿野の元気につなげていこうという思いから発足したのが「てごの会」です。

1月18日午後2時から、雪模様の中、コアプラザかのにおいて、菅原監督、そしてこの新作映画のプロデューサーである作間さん同席のもと、報道機関の方々も多数取材に来られ、設立記者会見が行われました。

鹿野地区のコミュニティ団体や自治会連合会、かの高原開発、ブランド研究会、観光協会、商工会など、鹿野を元気にしよう、鹿野のために頑張ろうという団体、メンバーで組織されています。

てごの会 会長 一原 英樹



平成23年10月23日に菅原監督の新作映画製作の応援に向けて「てごの会」を発足しました。この映画の製作・完成は鹿野にとって千載一遇のチャンス・機会をいただいたと思っております。鹿野だけでなく周南市を全国に発信するため、製作実現・完成に向けて「てごの会」では多くみなさんの参加・協力をいただきながら、応援の輪を広げていき、お手伝いができたらと思っています。」

←記者会見後に取材を受ける一原会長。

— 映画について —

映画のタイトルは「(仮題)川が好き 川にうつった 空も好き」。映画の主人公である有國遊雲君が中学1年生の時、闘病生活が続ける中、国土交通省が行った河川愛護の標語募集において、ふるさと鹿野の美しい川・渋川を思いながら応募し、見事大臣表彰を受けた作品です。

原作は有國遊雲君のお父さんであり、鹿野の渋川地区にある長久寺の住職・有國智光さんの著書「遊雲さん 父さん」です。この本を読んで感動した菅原監督が「命の大切さ」を、映画を通して表現したいと映画化を決定されました。

有國遊雲君は小学6年生の時に小児がん（ユーイング肉腫）と診断され、中学3年生・15歳で生涯を閉じることになります。最後の言葉は「母さん、ありがとう。みんなにもありがとうっていつてね。ぼくはもう往きます」でした。

突然息子の身を襲ったがん。父は戸惑いながらも、ありのままを息子に伝えます。「高校生の遊雲さんには会えないかもしれない。でも、何があっても大丈夫だからね。」。そして父は我が子の命を救うことの出来ない無力さに苦悩します。

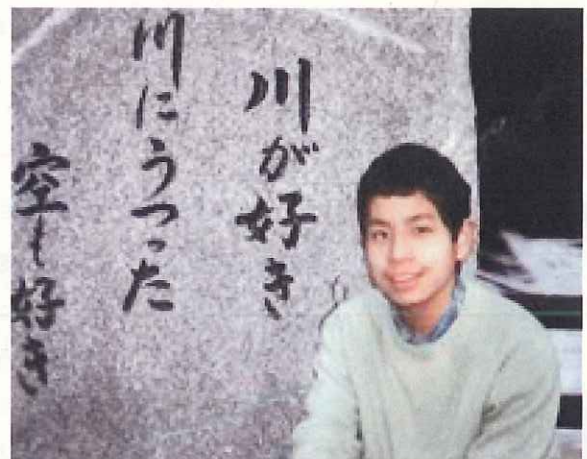
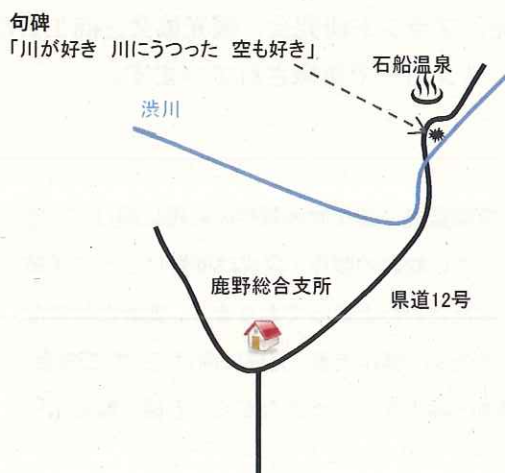
一方、「がん」さえも、「影丸」と名付けて、愛しむかの様に寄添い生きる遊雲君。「死ぬことをきちんと考えるって、ほんとうはそんなに大変なことじゃなくて、今を精いっぱい楽しむってこと」と、最後の最後の時まで、一瞬一瞬を大事に「今」を精一杯に生きていく。この姿が家族や同級生、友達そして鹿野の美しい自然とともに、描かれます。

この機関誌では映画や、「てごの会」の活動、そして舞台となる鹿野の魅力を紹介していきます。

〈ほっと一息・鹿野みどころ〉

有國遊雲君が国土交通省の大臣表彰を受けた標語「川が好き 川にうつった 空も好き」の句碑が渋川地区の皆さんの手によって、渋川のほとりに建てられています。

渋川地区にある石船温泉・憩いの家の前の農村公園内です。春ともなれば桜で彩られる心落ち着ける渋川沿いです。



有國遊雲くんと句碑「川が好き 川にうつった 空も好き」